

海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。



佐々 信行
さっさ のぶゆき

啓明学園初等学校 校長

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）、ワシントン補習授業校を経て、現職。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
東京都昭島市拝島町 5-11-15
代表： 042-541-1003
国際教育センター： 042-546-5881
www.keimei.ac.jp

「思いこみ」にご注意

今、日本の公立小学校に教科として英語が導入されるかどうかということが大きな関心事になっています。そのこともあって、英語の学習についての議論が盛んに行われているのですが、往々にして、その議論があまり根拠のない前提の上に展開しているのが気になります。

海外で子どもたちの外国語の学習を考えるとときにも参考になると思いますので、日本国内でよく聞く「思いこみ」について考えてみたいと思います。

<思いこみ その1>

「アメリカに住めば英語は自然に身につく」

言葉の学習は、よく水泳に例えられます。「水の中に放りこめば必死で泳ぐようになる」という議論を展開する人がいます。「いきなり英語の世界に放り込まれれば、分からないことを必死で分かろうとするから、なんとかなる。」という考え方ですが、子どもたちの場合、実際は、むしろ「聞いていることが分からない」という状態に慣れてしまって、耳に入っていることを無視することで心の安定を保とうとすることが多いのです。泳げない人を水に投げ込んで放っておけば、泳げるようになる前におぼれてしまう人がほとんどではないでしょうか。

現地校で十分に勉強できるくらいの英語の力をつけた人はたくさんいますが、それは、本人と家族の大きな努力の結果です。「自然に」任せておいたのでは英語の力は伸びません。学校の宿題をきちんと消化するだけでも、初めはたいへんですが、家族を総動員してでもなんとか宿題をこなし、学校の学習に少しずつ自信が持てるようにしていかなければなりません。子どもたちが英語という水の中に放り込まれることが避けられないのなら、初めは、浮き輪を用意したり、手に捕まらせてやったりして、おぼれさせないようにすることが絶対に必要です。

